

飛鳥・奈良と「汎ユーラシアのイラン文化」

青木健

17

中国新疆ウイグル自治区に於けるゾロアスター教・マニ教遺跡（トウルファン篇）

連載第9回に当たるホラズム編（『ユーロナラジア』第9号参照）までは、マニ教遺跡はともかく、ゾロアスター教遺跡には豊富に恵まれていた。しかし、キルギスを越えて新疆ウイグル自治区に入るあたりから、ゾロアスター教遺跡が確実に減少し、殆どパンドと程度の絶滅危惧種と化してきた。ゾロアスター教遺跡を酸素同様の生命源としているイラン学者としては、ゾロアスター教遺跡が足りずに窒息しかねない状況である。

これには、恨めしき二重の理由がある。第一の理由は、「云うまでもなくイスラーム教徒の活躍である。だが、この条件だけなら、イランやタジキスタンでも同一の情景が展開されていなくてはならない。そこに到来する第

二の理由が、西域における仏教の隆盛である。日本人の目には、前者は障碍として認識されやすいが、後者は感激措くあたわざる対象であって、障碍とは捉えられない。しかし、イラン学者の目から見れば、仏教もまた、ゾロアスター教遺跡やマニ教遺跡を覆い隠す要因の一つとなっている。

以下では、涼しい時刻を見計らってトウルファン中を動き回り、頑張って掻き集めたゾロアスター教遺跡とマニ教遺跡の情報を書き記す。しかし、その痕跡は、イランから波及した遺跡の名残も名残、仇しが原の道の霜の如く、東へ向かって一足ごとに消えてゆくものである。



地図：トウルファン市街地



写真1：交河故城の康一族墓の遠景



写真2：勝金口千仏洞

①交河故城の康一族墓・・・トウルファン市の西方11キロ地点にある交河故城は、紀元前2世紀から14世紀まで存続した中国最古級の都市遺跡である。2つの川の中州に土を掘って造られており、地理的条件は非常に優れている。城壁内部は、軍人街・官庁街・仏教寺院街に三分されていて、宗教的には仏教

の勢力が強かったようである。2004年、2005年に、この西方の公共墓地で、唐代の「康氏一族」というサマルカンド出身のゾロアスター教徒ソグド人の漢民族化した墓（つまり土葬墓）が36基発見されている。発掘報告の詳細については、李肖（他）2006年を参照。

②勝金口千仏洞・・・トウルファン市から東へ40キロ離れた火焰山の山麓には、勝金口千仏洞（センギム）がある。ここは、唐代から元代にかけて、詞条川峡谷沿いに栄えた石窟寺院遺跡である。10個の石窟の大部分は仏教遺跡だが、北寺3号遺跡にはマニ教遺跡と思われるものも含まれている。

③ベゼクリク千仏洞・・・トウルファン市から東へ50キロ離れた火焰山山麓には、ベゼクリク千仏洞がある。ここは、5世紀から14世紀にかけて、火焰山の山腹沿いに掘られた77の石窟遺跡である。このうち、第38石窟がマニ教遺跡といわれている。普段は閉鎖している第38石窟を特別に開けて貰い、懐中電灯でチェックした。正面に描かれた生命の木は、確かにイラン系の思想を表しているように思われた。だが、側面に拜火壇らしき絵画表現があった。寡聞にしてマニ教徒が拜火儀礼を実践したとの話は聞かないので、ゾロアスター教石窟としての時期があった可能性もある。尤も、実際に石窟内で拜火儀礼を行ったら、一酸化炭素中毒を引き起こすことは必定だが。

第27石窟は、マニ教壁画の上に仏教壁画を描いた二重壁画で名高い。



写真3：ベゼクリク千仏洞

第8石窟にもマニ文字による落書きがある
とされるが（吉田 1991年参照）、筆者は
この石窟の調査許可を申請し損ね、トゥル
ファンではウルムチの共産党本部への申請が
できず、未見の儘終わった。

④ 高昌故城・・・トゥルファン市から東へ

40キロ地点にある高昌故城は、5世紀から15世紀まで栄えたトゥルファン盆地の首府である。因みに、北京時間の16:00頃に到着したのだが、現地では1日で最も暑いとされる時刻で、温度計は43℃を指し示していた。火焔山から吹き降ろす熱風は、この惑星のものとは思えない。

マニ教の寺院建築があったと考えられているa遺跡は、案内人によって容易に見えできた。しかし、K遺跡は、とうとう特定できなかった。ある幅で「だいたいこの辺り」と見当を付けられただけである。このK遺跡からは、20世紀初頭にドイツ中央アジア探検隊によって、イラン系言語のマニ教文献が大量に発見されている。まさに、「近代マニ教研究発祥の地」である。

なお、吐峪溝千仏洞へは、雨で道が崩れてしまったそう、物理的に行けなかった。目的は、ここで発見されたゾロアスター教徒のオスアリ2つだったのだが、筆者が知る限り、オスアリ形式でゾロアスター教徒の埋葬が行われた東の限界がここである。

* * *

斯くして、トゥルファン盆地の交河故城も



写真4：高昌故城のマニ教遺跡

勝金口千仏洞もベゼクリク千仏洞も高昌故城も、「千仏洞」との名称が示すように、尽く仏教遺跡が大勢を占めているのである。4〜10世紀の西域には、ゾロアスター教もマニ教もキリスト教もあったのにも拘わらず、何故に仏教の一人勝ち状態になったのであろうか？ この疑問に関しては、トゥルファン

	8世紀	10世紀	12世紀	14世紀	16世紀
ゾロアスター教	○	△	×	×	×
マニ教	○	△	×	×	×
仏教	○	○	○	△	×
イスラーム	×	×	×	△	○

表：トゥルファンに於ける各宗教の勢力消長

でどの宗教がどの時点まで生命力を保っていたかの情報整理が有益だろう。

トゥルファンに於けるゾロアスター教の生命力の証拠は、吐峪溝千仏洞周辺でのオスアリが下限と考えられる。上述のベゼクリク千仏洞第38窟の壁画が拝火壇だった可能性はあるとしても、その年代は分からない。しかも、交河

は、ゾロアスター教の存立基盤であるソグド人の間でさえ、唐代には漢民族風の土葬が導入され、徐々に漢化が進行している状況が垣間見られる。

マニ教は、一時的にウイグル王国の国教としてトゥルファンで隆盛したものの、10世紀後半には仏教に押されて衰退に向かった（マ

ニ教の衰退時期については諸説あるが、ここでは森安 2015年、p. 590以下に従う）。仏教は、2世紀のクシヤナ朝時代に伝播して以降、トゥルファンにイスラーム教徒が進出する14世紀末までは余喘を保っていた。そのイスラームは、15世紀にモグーリスタン・ハーシム（東チャガタイ・ハーシム国）が首都をトゥルファンに定めて以降、この地で勢力を確立し、現代に至るまで主要宗教として繁栄している。現代の目から見れば新疆ウイグル自治区の主要宗教となつているイスラームは、トゥルファンでは、約1200年間根付いていた仏教に比べて、ずっと短い500年程度の歴史しか有していない。

ゾロアスター教やマニ教は、西アジアや中央アジアでは、10世紀までにイスラームに競り負けて姿を消していった。我々の脳裏には、どうしてもこのイメージが固着している。しかし、西域では、10世紀までに仏教に競り負けて姿を消したのである。この事実は、

「仏教は他宗教を迫害することにはなかった」との言説に対する有力な反証になり得ると思う。西域仏教は、確かにイスラームに圧倒されて消滅したが、自らもまた、ゾロアスター教やマニ教を消滅に追い込んでいく。夢の夢こそ哀れなれ、

隠滅されたゾロアスター教遺跡・マニ教遺跡の上には仏教遺跡が聳え立ち、往古の梵鐘はアフラ・マズダーを哭すべく、寂滅為楽と鳴り響いていたのである。

参考文献

- 丸山綱二 2012年『新疆トルファン地方のイスラーム化と仏教衰退―中国新疆イスラーム教小史⑤』、『文教大学国際学部紀要』第23巻第1号、p. 91-100。
- 森安孝夫 2015年『東西ウイグルと中央ユーラシア』、名古屋大学出版会。
- 吉田豊 1991年『新疆维吾尔自治区新出ソグド語資料』、『神戸市外国語大学外国語研究』第23巻、p. 1-33。
- 李肖、張永兵、張振峰 2006年『新疆吐魯番地区交河故城西墓地康氏家族墓』、『考古』(2006年12月号)。



あおき・たけし

1972(昭和47)年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士(文学)。現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『ゾロアスター教史』(刀水書房)、『マニ教』(講談社選書メチエ)、『古代オリエントの宗教』(講談社現代新書)など著書多数。